

天野祐吉さん最後のメッセージ

写真は天野祐吉『成長から成熟へ—さよなら経済大国』集英社新書、2013年である。確か2014年の正月に読んだ。広告から見た「欲望の60年」に引き込まれた。天野さんは2年前の10月20日に亡くなった。本書は希代のコラムニストの最後のメッセージだ。エピソード「新しい時代への旅」の最後を紹介したい。

仕事場の窓から見える風景や、窓ごしに聞こえてくる声を、思い出すままに書いてみたら、こんなふうになりました。1940年代～2010年代までの、これはぼくの日記みたいなものです。

アメリカの爆撃機が落とす焼夷弾の中を逃げまわった日々から、アメリカの核の傘の下で過ごしている日々まで、よくも悪くもアメリカと縁の切れない70余年でしたが、この間の大きな出来事と言えば、やはり8・15の敗戦と3・11の大災害です。8・15で成長社会が始まり、3・11で成長社会から成熟社会への転換が始まるという、この二つの日付は、ぼくにとってもこの国にとっても大きな転換点になりました。

が、3・11を契機とするこの国の再生は、まだ遅々として進まない。それは災害地の復旧だけではありません。日本そのものの再生も、うやむやになっている。それどころか、いまの政権は、3・11以後の日本の再生ではなく、3・11以前の日本を再生しようとしているように思えます。

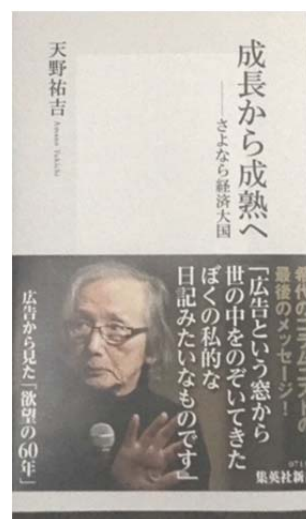
政治家の人たちも、憲法をいじったり原発の再稼働をはかったりするヒマがあったら、経済大国や軍事大国は米さんや中さんにまかせて、新しい日本の国づくりに取り組んでほしいものです。

30年ほど前、哲学者の久野収先生に聞いた話を、いま思い出しています。

昔の中国の皇帝は、画家や陶芸家の品等を、専門のスタッフと相談してきめたらしい。で、その一等を“一品”といった。天下一品なんていう、あの一品ですね。で、以下、二等・三等----ではなく、二品・三品----という呼び方で格付けしたそうです。が、中国の面白いところは、その審査のモノサシでは測れないが、個性的ですぐれていると思われるものは、「絶品」とか「別品」として認めた、というんですね。

そのときの久野先生によると、

「別品（別嬪）といったら、今では美人のことを指しますが、もともとはちよつと違ふようですね。だいたいあれは関西から出てきた言葉でしょう。関西では、芸者と御料人



さんとか、正統派の美女に対して、ちょっと別の、声がハスキーだとか、ファニーフェイスだとか、そういう美女を別嬪と呼んだわけですね。ところがいまは俗流化して、別嬪というと美人のことになってしまった。ぼくが言いたいのは、別品とか逸品とか絶品というのは、非主流ではあるけれど、時を経ると、どちらが一位であるかわからないような状況の生じる可能性があるということなんですね」

別品。

いいなあ。経済力にせよ、軍事力にせよ、日本は一位とか二位とかを争う野暮な国じゃなくていい。「別品」の国でありたいと思うのです。

なんだか今の日本に響くことばが続く。朝日新聞「CM天気図」を愛読していたので、天野祐吉さんなら、安保法案の成立をどう言うか聞きたかった。やはり、この本は希代のコラムニストの天野さんらしい「最後のメッセージ」だ。

(2015年9月27日)